

彼女を困難に陥れるのは、周囲の大人たち

男性への期待より女性の連帯を

すぐそこにいる女の子の深い苦悩と絶望。

追い込んだのは、大人たちの無知と、支援機関の不適切な対応だ。

買春を正当化するオトコがいる異常さへの認識不足。

男性に期待できない中で、仁藤さんはどう考えているのか。

一般社団法人 Colabo 代表

仁藤夢乃

●にとう・ゆめの 1989年生まれ。中高時代に街をさまよう生活を送った経験から、一般社団法人 Colabo を立ち上げ、10代女性を支える活動を行っている。明治学院大学国際平和研究所研究員。第30期東京都「青少年問題協議会」委員。著書『難民高校生』（英治出版）、「女子高生の裏社会」（光文社新書）。

安心できる場がない少女たち

——中高生世代の女の子を中心にサポートする団体「Colabo」を、二〇一一年に設立されました。行き場も居場所もないと感じている少女たちは多いのですか？

居場所がないと感じて街の中にいるしかない子たちは、関係性の貧困

に陥っている子が少なくありません。

親の虐待だけでなく、家庭や学校で孤立していたり、疎外感を感じていたり、ごく平和な家庭で育っている子でも「親の過干渉が息苦しい。少しでも家から離れたい」と思ったりするんですね。

そのような子たちと、近年は年間五〇〇人くらいつながっています。最近ではコロナ禍で相談が急増してい

れに耐えられず相談してくる人がとても増えているんです。さらに二十代の女性もバイトや仕事がなくなっ

て生活できない方が増え、昨年からは二十代女性への支援も始めました。

もちろん、誰もが大変な状況ですし、何とか現状を変えようとサポートをしているのですが、数が多過ぎ

ただ、本当に困っている子は自ら「助けて」を言えないですし、相談に行こうとも、相談しようともなかなか思えません。ですから待っているのではなく、自分たちから会いに行くことも必要と考えていて、アウトリーチ活動に力を入れています。

—— Colabo では、虐待や性暴力被害に遭った十代の女の子たちを支える活動をされていますが、活動内容について教えてください。

私たちが行っていることは大きく、相談事業、アウトリーチ活動、宿泊支援、現状を伝える活動などに分かれます。相談事業では、ツイッター、インスタグラム、LINEなど、若い

世代に馴染みのあるSNSなどのツールを通して寄せられる相談に対応し、必要に応じて、役所、警察、児童相談所、学校、病院などへの同行支援を行ったりもしています。

「助けて」を言えないですし、相談に行こうとも、相談しようともなかなか思えません。ですから待っているのではなく、自分たちから会いに行くことも必要と考えていて、アウトリーチ活動に力を入れています。そのひとつが声かけで、もうひとつが新宿と渋谷で週に一回、夜の六時から十時までオープンしている十代女性限定の無料のバスカフェです。

かばん、マスク、消毒薬などを用意して、自由に持っていけるようになっています。食品も無料で持ち帰ることがができます。

バスカフェを始めたのは二〇一八年十月からですが、それまでは少女たちに声をかけても警戒されることが多く、相談に来てくれたとしても、関係性を深めていくことが難しかったですね。そうしたとき、一七年にバスを使って青少年にアウトリーチをしている韓国の民間団体とつながりができて、それを参考にスタートさせました。

また緊急時の宿泊支援として、私たちが運営している一時シェルターでの保護も行っていますし、中長期シェルターの運営もしています。十代で虐待を受けて、家出して性搾取の被害に遭っている子たちは深いトラウマも抱えています。そういう子